

説教余滴 2020年8月2日《首都ローマ》

ローマという都市は、古代から世界の中心であり、経済・文化・政治・軍事などすべての点で世界の華であり、人々の喝仰の的でした。

ローマは一日にして成らず、全ての道はローマに通ず、永遠の都ローマ、

早い時代からローマには数多くの異民族が存在し、共生していました。共和制から帝政時代は遠征、征服、統治を繰り返していたためです。捕虜として連行され、奴隷に売られやがて解放奴隷となる。それ以外に、自由を認められた商人や軍人たちも多かったことでしょう。

ローマを観たことがあります。何もわかりませんでした。

フォロ・ロマーノ、首都ローマの中心部の遺跡、街路が真っ直ぐに伸び、両側に商店街。

説明されても生活が見えてきません。コロッセウムもそうです。円形闘技場。実に大きい建物、ここでキリスト教徒が殺された。十字架が立っていました。後になり、地下室の柱の上になる部分に床板が張られた状態、その上で競技が行われたのか、とようやく理解できました。多くの観衆が集まった理由は何か、どのようにして建設されたのか、そのための費用はどこから支出されたのか、だれのための施設なのか、何もわからない。あまり面白くなかった。以来、ローマについて学習し、考えてきました。

頭の中に残っているものは何でしょうか。「偉大な建築家、建設業ローマ」ということです。ローマは、自国を守るために防衛前線をできるだけ遠くに離したい、と考えました。いつの時代でも同じでしょう。自国外で戦い、自国は戦争のない平和な状態にする。「パックス ロマーノ、ローマの平和」の実相です。

遠征と征服は、新しい都市、道路、水道などの建設を生み出し続けました。劇場・闘技場・浴場なども、市民を手なずけるために必要とされました。こうしてイタリア人は、建設、建築に習熟しました。